

『聖なるものの刻印』

科学的合理性はなぜ盲目的なのか』

J・P・デュピュイ著 以文社・三三六〇円

かつて人間が自らの暴力を排出し外化したものであった「聖なるもの」は、やがて近代の「脱魔術化」を経て、科学にその座を追われる。

科学的理性は、自然を、歴史を、人間を常に「対象」とする、即ち自らがそれに属することを捨象し、外側からそれらを観察すること（ことが出来ると信じる）。時間も数直線のように表象するから、「いま」はその直線上の一点に過ぎず、未来もまた同一直線上にある「対象」である。それゆえ、科学にとって未来は予言は可能なものになる。

だが、未来から見ると過去である現在の人間が予言を聞き、それを回避すべく行動することも可能である。その場合、予言は外れるためになされることになる。

こうした矛盾は、科学的理性が、自らが対象に含まれていることを知らず、認識を独立させるために生じる。実際には、認識は実践を促し、実践は存在を変化させる。

デュピュイの議論の中では、認識論と倫理學と存在論が一つになる。

科学的理性により、世界は数値化された。政治は票数となり、経済は市場による「合理的な価格決定」となった。だが、先の予言と行動の弁証法により、欲望の鏡像的模倣の場である市場の安定はありえず、ある日突然破局を迎える。

核兵器による破局は眼前にあり、環境の破局も現実視される。だが科学はそれを見過ごす、或いは見ようとしなない。自らを外部にある「聖なるもの」と信じているからだ。それを「傲慢」と言う。

当事者としてそれを避けんが為に直視するデュピュイの「賢明な破局主義」を、支持したいと思う所以である。 (フ)